

柳田国男における〈郷土〉概念の形成

——新渡戸稲造の〈地方（ヂカタ）〉概念の受容と「転回」——

鵜野祐介

Formation of the 'Kyoudo' Concept in YANAGITA's Theory

UNO Yusuke

序

“手の中にどんぐりといふ故国あり¹⁾”——オランダに長年暮らす日本人女性によって詠まれたこの句は、文化の普遍性と相対性をめぐる次のような思いを読者の心に起こさせる。異郷の地において偶々見つけたどんぐりの実を手に取り、故国（故郷）に思いを馳せるという作者の心情はおそらく、誰しも共感できる普遍的な心情と言えよう。そしてまた、「どんぐり」を「故国」のミクロコスモスとして象徴させ、17音の言語空間の中に完結した詩的世界を凝縮させるという表現方法に、「日本人的感性」と一般に表現されるような、文化の相対性を見ることもできるのではないか——。

今日、わが国では「教育の国際化」が提唱され、「異文化理解」が重要な課題となっているが、そこには文化の普遍性と相対性の問題が内在している。1930年代にアメリカの人類学者ベネディクト [Benedict R.] 等によって提起された「文化相対主義」は、西欧文化中心主義を批判し文化の多様性と価値における平等性、他者や異文化への寛容等を主張することによって、民族自決主義の主張や第三世界の台頭、多民族複合社会におけるマイノリティの地位向上等に大きな貢献を果たした。ところが第二次世界大戦の後、ファシズムに対して闘い取られた「自由・平等・民主主義」は人類の普遍的価値ではないかとの問いや、「文化相対主義」は物質的文化の向上への欲求を認めず、「未開社会」を「未開」のままに保存しておこうとするものである、との批判が提出される。さらに1970年代後半以降、「文化相対主義」は「未開」文化のユートピア性の強調による西欧社会の逆差別であるという「逆差別論」、宗教的ファンダメンタリズムやギリシャに発する西欧的伝統の再編成の主張といった、普遍的文化を志向する「反文化相対主義」が提起されるに到る²⁾。

ここにおいて「文化相対主義」の隘路を克服し、また欧米中心主義の復活を導きかねない「反文化相対主義」とも異なる第三の途としての、自己と他者、相互の主体性と差異性を認め合うと同時に共同性を保持し共存を志向するという、「異質との共存」の関係性の構築が、「異文化理解」の前提条件となる今日的課題として掲げられるのである。

以上のような認識に基づき、本稿では柳田国男における〈郷土〉概念の考究を行う。つまり柳田における〈郷土〉概念の形成過程を考察する中で、先の課題が今日的であるだけでなく歴史的

課題でもあったことを明示し、そしてこの課題に対して柳田が、彼の生きた時代状況の中で如何に取り組んだのかを解明することが本稿の第一の主題となる。

さて、柳田の〈郷土〉研究が本格的に始動するのは、1910年代前半のことである。即ち農政官僚として“上からの改革”を唱導していた彼が、1910年の『時代ト農政』刊行を最後にこの立場を捨て、民族文化の主体たる「郷民³⁾」自身による改革としての“下からの改革”を志して「郷土会」に参加し、ついで雑誌『郷土研究』を出版するに到った数年間である。ところで、この転換期に大きな影響を及ぼしたのが新渡戸稲造の「地方学（ヂカタガク）」であることは周知の通りであるが、柳田が新渡戸のそれを如何に受容し、展開若しくは「転回」させたかについて、これまで十分な検討が行われてきたとは決して言えない⁴⁾。そしてまた、新渡戸自身が「地方学」の構想に当たって依拠したと言明するシーボーム（Seeborn F.）の『イギリス村落社会 [The English Village Community]』⁵⁾と、新渡戸の「地方学」及び柳田の〈郷土〉研究との異同関係についての考究も、管見の及ぶ限りでは見当たらない。従ってこれら三者の異同関係の考究が第二の主題となる。

以上より本稿は、シーボームの「村落研究」、新渡戸稲造の「地方学」、そして柳田国男における1910年代前半の〈郷土〉研究（以下、「初期〈郷土〉研究」と記す）を順に検討し、三者の異同関係について、特に新渡戸における〈地方（ヂカタ）〉、柳田における〈郷土〉、両概念に内在する思想的意味に着目しながら解明する、そしてこれを通じて柳田の〈郷土〉概念の（先に述べた「異質との共存」という課題との関連における）歴史的かつ今日的な意味について考究することを主題とする。

I. 時代状況

はじめに、新渡戸と柳田が農政学者或いは農政官僚としての言説を行い、その後に「地方学」や〈郷土〉研究を構想し実践していった1900年代初頭から10年代前半にかけての時代状況について概説しておきたい。

当時の日本は、日露戦争・第一次世界大戦といった大きな軍事的緊張の下に置かれ、その中で軍事力を増強し西洋列強諸国に伍して大陸進出への気運を強めていこうという帝国主義的思潮が軍部・政界に広がっていた。また経済界においては、鉄鋼業を中心とする第二次産業革命が進展し、繊維工業を始めとする軽工業を含めた第二次産業の近代化は流通・貿易等第三次産業を刺激し、行政主導型の資本主義的経済体制が形成されつつあった。そしてこれら帝国主義的軍国主義と行政主導型資本主義の両者は、軍需産業の活況に基づく強大な経済力を後盾として軍事大国への途をとらんとする志向において、相互補完的な役割を果たすものであった。

こうした思潮を受け、教育界においても一方で天皇制イデオロギーを拝受する皇国軍人の養成及び国民的共同意識の育成のための教育が、教育勅語の徹底や教科書の国定化等を通じて内容・制度の両面から図られ、他方で第二・第三次産業の発達に見合う産業各層の人材養成のための教育が、実業教育や中等教育、女子教育の制度的改革を通して図られた。

ところでこのような状況の下、都市と農村の格差は、生活様式においても生活水準においても拡大の一途を辿り、農村の青年層は都市へと流出し、農村の疲弊は甚だしいものとなっていた。

これに対して、「地方改良運動」と概括される農村改革のための様々な政策や運動が行われた。「町村是」の作成、産業組合の設立、零細小農層の保護、といった政策・行政指導のみならず、報徳会などの民間団体の運動も展開され、官民挙げて「農村の救済」が叫ばれた。

これに対して、新渡戸と柳田は当初、農政学的イデオログとして関与していく。そうして共に、疲弊した農村に生活する人々を救済する方途として、それぞれの地方における農村生活の実情を調査し理解すること（農村生活の実証的研究）の肝要性に思い到る。

以上より、新渡戸と柳田、両者の「農村生活の実証的研究」への視角が、当時の時代状況と密接な関連において成立したものであること、また、国民の大多数を占める農村住民（子どもを含む）に対して、国民的な共同意識、及び自らの地域に対する誇りを育む源泉となる地域的な独自性の認識、この双方を形成し育成することが当時における大きな教育的課題とされていたこと、の二点が確認される。

II. シーボームの「村落研究」

新渡戸稲造は1898年に刊行した『農業本論』、及び1907年の報徳会における講演「地方（ヂカタ）の研究」の中で、「地方学」を構想し提唱した。

この『農業本論』の中で新渡戸は、「斯の新学科の祖宗とも謂ふべき、英人 Seeböhm 氏の著書を読むに、嶄新にして興味多き材料に満ち、其範囲は浩漭汎博にして、時に或は論及して現今の政治論に渉るものあり⁷⁾」と述べ、「地方学」の構想にとってシーボームの『イギリス村落社会』が大きな影響力を持ったことを言明している。そこでこの「著書」を繙き、シーボームの「村落研究」の検討を行う。

シーボーム『イギリス村落社会』は、副題「荘園制・部族制との関係における、及び（イギリスにおける農耕地の通常形態である）オープンフィールドシステムとの関係における考察⁸⁾」が示すように、地理学と歴史学を交錯させた、イギリスにおける村落研究の特色の好例と言われる⁹⁾。

同書の執筆意図は、政治史や侵略・征服史、戦乱史を中心にして編纂された従来のイギリス史を、「地方経済史」的視角から再検討することにあつた¹⁰⁾。「地方経済史」的視角とは具体的には、各地方に保存されている文献資料（土地台帳、戸籍、古文書等）の他に、集落形態・耕地形態等の地形、地名をはじめとする非文献資料を駆使して、地域社会の形成因・耕地形態・イデオロギー（当該社会の成員が共有する価値観念）、以上三者の関係性の歴史的変遷を解明する作業を意味している。そしてこの作業を通して得られた「イギリス村落史」を略述すれば、次のようになる。

イギリスの村落史を遡る時、約2000年前までに [pre-Roman 期]、東部地方において農奴制 [serfdom] に基づく村落社会 [village community] が、西部地方において血縁的結合に基づく部族社会 [tribal community] がそれぞれ独立的に成立した。二つの社会は別個の理由によってではあるが、ともに「オープンフィールドシステム [open-field system]」という耕地形態をとり、また共に「共有性 [communitiy]」「平等性 [equality]」という二つのイデオロギーを内在させていた。

この耕地形態と二つのイデオロギーは、ローマ人・イングランド人 [English]・ノルマン人などの侵入に影響を受けながらも、基本的に保持され続けた。ところが「民族的レベルを越えた経済

鶴野：柳田国男における〈郷土〉概念の形成—新渡戸稲造の〈地方（ヂカタ）〉概念の受容と「転回」—の発達 [an altogether wider range of economic development than that of one or two races]¹¹⁾によって、新たな秩序 [new order] としてのイデオロギーが生じた。即ち、「個人の自由と企図 [enterprise] 及び利害の尊重」というイデオロギーであり、これが旧イデオロギーと戦い、勝利する。これをイギリス村落史における最も大きな歴史的転換期として位置づけることができる、と。

以上より、シーボームの「村落研究」の特色を要約すれば、先にも触れたように、まず「地方経済史」的視角からの「イギリス村落史」の編纂という構想そのものに特色を見出すことができる。政治や戦乱に焦点を据え、偉人や英雄の列伝といった趣きを持つ従来の一国史（この場合は「イギリス史」）には登場し得ない地方村落の産業や経済、一般民衆の日常生活の歴史的変化を考察することにより、民衆レベルの「歴史の流れ」と、中央の上層階級におけるそれとの質的な差異を見出そうとした。これはある意味において、今日「社会史」や「民衆史」と呼ばれる領域と重なり合う、その先駆的研究と位置づけることも可能であろう。

次にその資料として用いたものも、従来の歴史学の枠組を超えたものとなっている。シーボームが特に重視したのは、先にも触れたように、集落や耕地の地形的（景観的）特色である。そして、景観的特色の歴史性——その起源と変容の過程——を考究することにより、集落や耕地を共通の歴史的形成因を有するいくつかの形態へと類型化するのである。（このような方法論は、ドイツ地理学、特にマイツェン [Meitzen A.] の研究に依拠するものであることを、シーボームは同書の序論 [Preface] で述べている。マイツェンは集落形態とその形成因である農業経済上の特質及び歴史的・地理的特質との関連に基づく、集落形態の類型化にすぐれた成果を上げたと評価されている¹²⁾。）

その他教会に残る土地台帳や地名をはじめ、各地方に残存する文献・非文献資料を手掛かりにして村落史を解明する。そしてこの「微視的考察」を比較総合することにより「イギリス村落史」という一国史を編纂する、との方法にも、シーボームの「村落研究」の特色を看取することができる。

Ⅲ. 新渡戸稲造の「地方学」

本節では、新渡戸の『農業本論』及び「地方の研究」の検討を通じて「地方学」の骨格を提示し、前節で述べたシーボームの「村落研究」との異同関係を明らかにする。

まず、「地方学」の定義について。『農業本論』には「*「デ・レ・ルスチカ」*即ち本邦の地方（地形）に関する諸般の事物を一束するの学術¹³⁾」「余の所謂「地方学」（Ruriology, Ruris 田舎 Logos 学問）¹⁴⁾」とあり、また「地方の研究」には「地方はヂカタと訓みたい。元は地形とも書いた。然しヂカタは地形のみに限らず、凡て都会に対して、田舎に関係ある農業なり、制度なり、其他百般の殊に就きて云へるものにて、夫れを学術的に研究して見たい考で、謂はゞ田舎学とも称すべきものである¹⁵⁾」と、述べられている。ここには、「地形」の重視が表明されると共に、新渡戸の〈地方〉概念の特徴（独自性）が示唆されている。つまり、〈地方〉は「都会」や「中央」に対するアンチテーゼとして措定され、また外来文化や近代文明に対置される“地（ヅ）に根ざした文化”，土着的な思想や文化の拠点として位置づけられているのである。

次に、「地方学」提唱の動機について。「地方の研究」の中で新渡戸は、それを「田舎の衰微」という「近時」の社会状況に求める。では何故、これが問題視されるのか。「田舎の衰微は、決して農業が衰微するばかりでは無い。第一、人間の品格を高くする事が出来ず、又た自治制の発達も出来ぬ¹⁶⁾」からである。つまり新渡戸にとって「田舎」とは、農産物（物的資源）と「品格」高い人間（人的資源）の供給地として、また住民自治の“演習地”として位置づけられており、これらの点において「田舎」は国家社会に貢献するものと見做されていたのである。このように重要な「田舎」が「衰微」している現在において為されるべき事とは何か。新渡戸はその方策を、地方の実情に相応した農村改良に求めた。「此の如く総て永く継続したる習慣には、何等かの理由の存するが故に、学者は須らく其所以を搜索すべきものなり。若し誤って習慣にのみ拘泥するときは農業の改良を為すべからず、更に習慣を顧みれば（顧みざれば）の誤植か……筆者注）、地方の民は改良法を授くとも受けざるべし¹⁷⁾」。つまり、今日の疲弊した農村を救済するためには農村改良が不可欠であるが、それが地方（田舎）の習俗をはじめとする生活実態に相応した、即ち“地に根ざしたもの”とならない限り効力を持たない。そしてこの、地方（田舎）の生活実態の把握こそ「地方学」の本分であり、この学を提唱する動機に他ならないと新渡戸は考えたに相違ない。従って「地方学」の研究目的は、最終的には「農村の救済」に置かれていたと言えるが、これを達成するために、第一に「都会」に対置される「地方（田舎）」の文化的・独自性の究明とこれに基づく「田舎に対する趣味と同情¹⁸⁾」の喚起、第二に、地方研究という「微視的考察」に基づく社会全体の仕組みの解明、第三に、政治史や戦乱史とは異なる歴史（新渡戸の言では「農業沿革史¹⁹⁾」）の編纂、といった目的が掲げられるのである。

次に、「地方学」研究の調査項目について。『農業本論』の中で断片的に挙げられているものを整理すれば〔家屋の形態・構造・面積、村落の形態、農業経営法、習俗（年中行事、儀礼、講中組織等）、地名、方言〕となる。また「地方の研究」では、〔旧記（旧家の記録、随筆物、村鏡、水帳、年貢に関する明細書等）、地名、家屋の建築法、村落の形態、土地の分割法、方言、俚歌童謡²⁰⁾〕が列挙されている。両者を要約すれば、以下のように分類できる。

文献資料	旧記 …… 旧家の記録、随筆物、村鏡、水帳、年貢に関する明細書
	景観 …… 家屋の形態・構造・面積、村落の形態、土地の分割法
非文献資料	口頭伝承 …… 地名、方言、俚歌童謡
	習俗 …… 年中行事、儀礼、講中組織
	農業経営法

また、「地方学」の方法論としては、研究目的の二番目でも触れた「微視的考察」が挙げられる。「彼の生物学者が顕微鏡を以てバクテリアなどを研究するやうに、其方法を籍りて之を社会学に応用して見たい。（中略）恰も一匹の虱でも、動物たる諸機関を悉く備へて居る如く、小を以て大を伸ばせば、夫で宜いのである。（中略）即ち一葉飛んで天下の秋を知る如く、一村一郷の事を細密に学術的に研究して行かば、国家社会の事は自然と分る道理である²¹⁾」。ここには、地方という小状況の分析によって国家社会という大状況の構造もアナログカルに把握することが可能である、との立場が表明されている。

最後に、「地方学」研究の意義について、新渡戸は次のように述べる。「要するに地方の研究は、第一自治制度の参考にもなり、又た都会は国民の体力を弱くする恐れがあるに反して、田舎は国民の体格を強め、元気を養ふが故に、教育にも効力があるから、成るべく青年をして地方土着の思想を起さしめなば、国力発展の上に多大に効験が顕はれるだらう。それ故に地方生活には新趣味を持たせたいものである²²⁾」。

以上より、新渡戸の構想する「地方学」の骨格を提示すれば、地方に残存する文献資料と非文献資料（景観・口頭伝承・習俗等）の分析によって、その地方に内在する文化的・歴史的特性を究明し、これを通して第一に〈地方〉の独自性と重要性を主張すること、第二に「地方土着の思想」を喚起すること、第三に社会史・経済史（新渡戸の言う「農業沿革史」）を描出すること、さらにこれら三者を通じて「農村の救済」に貢献することを意図した、との規定が可能であろう。

このような新渡戸の「地方学」を、前節において考察したシーボームの「村落研究」と比較してみたい。まずシーボームの影響が顕著に見られる点を挙げれば、第一にその目的としての、従来等閑に付されていた歴史論（「農業沿革史」）の構築、第二にその調査項目としての非文献資料、特に景観的特色の重視、第三にその方法としての「微視的考察」、等を指摘することができる。そして、他ならぬ〈地方〉への視角に新渡戸の独自性を見ることができであろう。「地方学」は二元論的パラダイム（思考法的枠組み）に貫かれる。「都会・中央の文化」と「周縁文化」との、「外来文化・近代文明」と「土着文化」との、「中央に残る文献資料によって構成された文化論・歴史論」と「地方に残る文献資料や非文献資料によって構成された文化論・歴史論」との対置によって、各々の対置における前者に偏傾している従来の文化論や歴史論を相対化し、後者の重要性を指摘する。これによって、「農村の救済」という実践性を内包した「経世済民の学」となることを新渡戸は期したのである。

最後に、彼の〈地方（ヂカタ）〉概念の特徴を整理しておく。

〈地方〉とは第一に「都会・中央」に對置される「周縁」の地であり、第二に「外来文化・近代文明」に對置される「土着文化・前近代文明」の拠点である。そして第三に、日本人の国民的特性の貯蔵庫であり、それ故、第四に国民の心身を保養し強靱ならしめ、「国力発展」に貢献すべき場所である、との4点を挙げることができる。

Ⅳ. 柳田国男の「初期〈郷土〉研究」

(1) 柳田における農村への視角

柳田が新渡戸の「地方学」に影響を受け、〈郷土〉研究に本格的に着手するまでの足跡を辿るとき、それ以前より彼の中に、農村に対する2つの視角が存在していたことが分かる。それは第一に、大学時代に農政学を専攻して以来、研究者として且つ農政官僚として培ってきた農政論的視角、第二に詩集「野辺のゆきき」から「幽冥談」や『遠野物語』に到る著作に通底する“幽冥趣味”的視角である。

まず、柳田の農政論的視角について。明治後期における農政論は大きく「農本主義に基づく地主制小農経営の保守」論と「近代合理主義に基づく自作農経営への転換」論に二分されるが、柳田の農政論は典型的に後者に属する。即ちそれは、小作料の金納化・引き下げ、耕地の零細性・

分散性の解消、都市への移住等による零細小作農の脱農化、産業組合による金融・流通面における協同運営の推進、等の諸政策を通じての「自立的小農経営の大衆的確立」を図るものであったと要約される²³⁾。

この時柳田の農村への視角とは、封建的な地主制小農経営によって疲弊し大量の零細小作農を抱えた、「啓蒙され近代化されるべき」土地及びその住民であったと考えられる。この認識の下に彼は“上からの改革”を政策論的に推進していく。けれども、推進すべき近代合理的な政策の多くは、西洋における農政論を敷衍したものであり、わが国の実情に沿うものとは言えず、むしろ柳田が批判する「保守」論の側に、国情に沿い農民自身の支持を得る所が多く含まれていた。ここに柳田は、“上からの改革”の限界を痛感すると同時に、農村の生活実態を把握することの重要性に思い到っていた。この動揺の只中において新渡戸の講演「地方の研究」に接したものと思われる²⁴⁾。

次に、柳田のいわゆる“幽冥趣味”，神秘的事象との関連における農村への視角について。彼は周知の通り、幼少期より神秘的事象への関心が強く、青年期に書かれた抒情詩の中にも「夢の世」や「たそがれの国」など、他界願望や厭世感を表出させたものが多く見られる。そしてこれらの感情乃至心性は、「母体的なところ、始源的な心性に還る」ことへの志向性を意味するものと見做しうるものであった²⁵⁾。そして農政官僚として全国各地の農村を訪れた際に様々な神秘的事象や宗教的習俗に触れ、農村に対して「始源的な心性」を胚胎する土壌との視角を得たと推察される。

以上二つの視角に、新渡戸の「地方学」に触れることにより〈地方〉的な視角が加えられ、柳田にとって農村とは次のような複合的意味をもつ概念となった。つまり、「農村」とは、現在の「疲弊」状態から脱却するために「改良」されるべき対象としてのみならず、自らの他界願望や厭世感を充たしてくれる「始源的な心性」を胚胎する場所として、さらに都市や中央と対置されるべき〈地方〉としての意味も内包するものとして位置づけられたのである。そしてこのような複合的な意味を内包する「農村」を柳田は〈郷土〉と呼称し、自らの学問研究の基軸に据えた。こうして彼の〈郷土〉研究は、「郷土会」と雑誌『郷土研究』を通じて始動するのである。

(2) 「郷土会」と雑誌『郷土研究』

1907年、新渡戸の講演「地方の研究」を聴講し彼の「地方学」構想に賛同した柳田は、小田内通敏を介して新渡戸と親交を結び、1910年より約10年間にわたり新渡戸邸にて開催された「郷土会」に幹事役として参加する。またこれより3年後の1913年、高木敏雄と共に雑誌『郷土研究』を発刊する（1917年まで）。本節では「郷土会」と雑誌『郷土研究』が柳田の「初期〈郷土〉研究」を相互補完的に構成していたと位置づけ、この両者の検討を通じて柳田の「初期〈郷土〉研究」の特色を究明してみたい。

まずその目的について、雑誌『郷土研究』の中で柳田は、「（「郷民」の中で）其志ある者をして此材料に基いて、どうすれば今後村が幸福に存続して行かれるかを覚らしむる²⁶⁾」ための「郷土誌」を編纂することを挙げる。一方「郷土会」における、会の趣旨について明文化されたものは残っていない。因みに新渡戸の「地方学」の目的と比較すれば、「村の幸福」或いは「農村の救済」といった「経世済民の学」への志向という点で両者は共通する。けれども新渡戸の場合には、「地方の研究」によって解明される、地方の独自の文化的歴史的特性とそこに脈打つ「地方土着の思

想」を以て、「都会人」や「中央人」を撃つことを企図したのに対し、柳田の場合は「郷民」自身の自覚もしくは覚醒のために行うものと位置づけている点に差異が見出される。

次に、その方法について。「郷土会」も雑誌『郷土研究』も比較研究を重視し、「微視的考察」を用い、非文献資料を重視した点において共通する。そして前者が地理学・農政学・建築学等、学際的なアプローチによって農村研究を行ったのに対して、後者は〈郷土〉研究に固有の方法論の確立を読者との紙上討議を通じて図ろうとした点に、差異を見出すことができる。

さらに調査項目については、「郷土会」が景観的特色や日常生活における特色に着眼したのに対し、雑誌『郷土研究』では民間信仰や“怪異なるもの”（山人・妖怪等）の研究が柳田自身の筆によって論じられた。ここには、先に触れた柳田の農村への視角のうち、〈地方〉的なものが前者に、“幽冥趣味”的なものが後者に投影していると言えよう。

以上の考察より、「初期〈郷土〉研究」の骨格を次のように提示することができる。

1. 農政官僚としての全国視察を通して重要性を痛感し、また「郷土会」における主要テーマとなった、農村における日常生活の文化的・歴史的特性に関する研究
2. 柳田自身の資質に由来する部分が大きく、雑誌『郷土研究』における主要テーマとなった、農山村における神秘的現象や信仰に関する研究
3. 雑誌『郷土研究』における主要テーマの一つである、学問的方法論の統一とその独自性の確立へ向けての研究

そしてこれら三つの考究を通して、「郷民」自身が自覚的に自らの〈郷土〉を改良していくための「自己省察の学」となることを、柳田はこの研究に託したのである。

V. 柳田における〈郷土〉概念

以上の考察を踏まえ、柳田の〈郷土〉概念を、新渡戸の〈地方〉概念との比較対照において措定してみたい。

前述したように、新渡戸の〈地方〉概念の特徴は二元論的パラダイムにある。これを以て、従来の文化論や歴史論そして農業政策の偏頗性を指摘することによって、「農村の救済」に貢献することを新渡戸は期した。

これに対して柳田は、わが国の文化や歴史を相対化し多元的に把握するという視角を、新渡戸の〈地方〉から受容するが、「都会・中央」対「田舎・地方」という二極への相対化ではなく、〈郷土〉という多極への相対化を図る。しかも〈郷土〉は、その景観や文化・歴史において多様な独自性を保持すると同時に、これに対する人々の思い（主情性）において同一の感覚を生じさせるものである。柳田は後にこの感覚の淵源を、「無垢の小児」に対する「母性愛」若しくは逆に“母なるもの”への思慕の情に求め²⁷⁾、さらにこうした心性がイエ（祖先・子孫を含む家族）及びムラ（自分が生まれ育った地域社会）の永続を願うプリミティブな信仰と連続性を持つことを解明しようと努めた。つまり、〈郷土〉とは多元的な文化の顕現地であると同時に、プリミティブな信仰に類縁性を持つ普遍的な心性の母胎でもあると解されたのである。ここに柳田の〈郷土〉研究を、都会人・地方人を問わず国民一人一人に自らの〈郷土〉の独自の文化的歴史的特性を自覚させ、主体的独立を図ると同時に、〈郷土〉への主情的同一性の自覚に基づく国民的共同意識の形成を図

ることを期するものとして措定することができる。

こうして、二元論的パラダイムに基づく新渡戸の〈地方〉概念を、一方で地方的独自性という多元的文化の拠点となり、他方でその基底に内在し主情的な同一意識を胚胎する普遍的文化の拠点となる、重層的構造を持つ〈郷土〉概念へと柳田は「転回」させ、「異質との共存」の関係性の構築という課題に応えようとした²⁸⁾。そして〈郷土〉における“多なるもの”と、その基底に内在する“一なるもの”の考究こそ、彼の〈郷土〉研究さらには「民俗学」に通底する主題となったのである。

結 語

本稿の内容を要約すれば、シーボームの「村落研究」、新渡戸の「地方学」、柳田の「初期〈郷土〉研究」、以上三者において順に、前者から受容した内容を後者が如何に展開若しくは「転回」したかについての考究と言える。

シーボームにおける「社会史」的な歴史へのアプローチ、社会の「微視的考察」による全体像の究明、地方に残存する文献資料と景観の特色や地名をはじめとする非文献資料の活用といった方法論は、新渡戸に、そして柳田において受容され継承される。新渡戸はこれに〈地方〉概念を導入することによって、近代文明・外来文化や既存の文化論や歴史論に対するアンチテーゼとなるべき「地方学」へと展開し、これを以て「農村の救済」という当今の課題に応えうる実践性を有する学問にしようと構想した。

そして柳田はこの「地方学」を、学際的アプローチに止まらぬ固有の方法論を有するものとしてべく方法論の整備に努めると共に、〈郷土〉概念を導入することによって新渡戸の二元的文化論を止揚する基層的な普遍的文化の所在を究明し、これを以て「国民的共同意識の育成」というもう一つの課題にも応えようとした、との帰結を見る。

特に、新渡戸の〈地方〉概念と柳田の〈郷土〉概念における共通性と差異性に注目するならば、これまでの社会科学研究において等閑視され瑣末事扱いされてきた、地域社会（地方）への着目により、従来の一元的な文化論や歴史論からの脱却が可能となる、との認識において両者は共通する。けれども〈地方〉が二元論的なパラダイムに貫かれるのに対し、〈郷土〉は表層における多元的文化と基層における普遍的文化との重層的構造を有するものとなる。ここに柳田の〈郷土〉概念における、新渡戸の〈地方〉概念の受容とその「転回」を見ることができるのである。

1920年代から30年代にかけての更に切迫する内外情勢の中で、柳田は〈郷土〉研究から「民俗学」へと学問的体系化を急ぐ。だが、時代はその学問的性格を国民的共同意識の創出、〈郷土〉における“一なるもの”の考究へと大きく傾斜させ、初期の〈郷土〉研究が保持していた多元論的視角を捨象させることになった。この狭隘化により彼の「民俗学」は、たとえ自らの意図に反することであったにせよ、結果的には「国民統合のイデオロギー創出の学」としての「新国学」として、軍事政権に利用される悲哀を見た。

けれども柳田の「初期〈郷土〉研究」に見られる、多元的文化と普遍的文化との重層的構造としての文化把握と、これに基づく地域的自立性と国民的共同性の相乗的な大衆の創出との構想は、今日再考に値するものと思われる。そして、彼の〈郷土〉研究から「民俗学」への展開における

“一なるもの”への傾斜の過程を通時的に辿ると共に、彼が普遍的心性として究明したプリミティブな信仰を、国家主義へと敷衍させるのではなく、全人類的な「異質との共存」への志向を胚胎する普遍的な文化として蘇生させること、ここに次なる課題が展望されるのである。

註

- 1) モーレンキャンプふゆこ作。「朝日俳壇」, 朝日新聞, 1990年9月29日朝刊掲載。
- 2) 青木保, 「文化の否定性」参照。雑誌『中央公論』1987年11月号所収, 中央公論社。『文化の否定性』所収, 中央公論社, 1988年。
- 3) 柳田国男, 「塚と森の話」。雑誌『斯民』第六卷第十〜十二号, 第七卷第一・二号所収, 報徳会, 1912年。『定本柳田国男集』第十二巻所収, 筑摩書房, 1969年, 439頁。
- 4) 新渡戸の柳田への影響について論じたものとして例えば, 後藤総一郎監修, 柳田国男研究会編著, 『柳田国男伝』三一書房, 1988年。蓮見音彦, 「新渡戸博士の農業論」。東京女子大学新渡戸稲造研究会編, 『新渡戸稲造研究』所収, 春秋社, 1969年。
- 5) Frederic Seebohm, The English Village Community, Messers Longmans, Green & Co., 1883 (Reprinted and published by the Cambridge University Press, 1926)。尚, 新渡戸が『農業本論』中に「引用書目」として挙げた書名は, “Village Community”であるが, シーボームの著作目録に同書は掲載されていない。従って前掲書が新渡戸の参照した書と推察される。
- 6) 柳田がシーボームの前掲書を読み, 直接的に影響を受けたか否かについては, 現存する資料からは断定し難い(成城大学発行の「柳田文庫蔵書目録(洋書)」(1967)にも同書は掲載されていない)。また, 柳田が自らの学を構築するにあたって影響を受けた人物は新渡戸・シーボームに限定されるものでないが, 本稿では両者との異同関係に絞って考察を行うことを注記しておく。
- 7) 新渡戸稲造, 『農業本論』裳華房, 1898年。『新渡戸稲造全集』第二巻所収, 教文館, 1969年, 241頁。
- 8) 副題の原文は次の通り。[EXAMINED IN ITS RELATIONS TO THE MANORIAL & TRIVIAL SYSTEMS AND TO THE COMMON OR OPEN FIELD SYSTEM OF HUSBANDRY]
- 9) 木内信蔵他編, 『集落地理講座 第一巻総論』朝倉書店, 1957年, 10頁。
- 10) Seebohm, *ibid.*, p. 440
- 11) *ibid.*, p. 440
- 12) 木内他, 前掲書参照。
- 13) 新渡戸, 前掲書, 96頁。
- 14) 同上, 241頁。
- 15) 新渡戸稲造, 「地方の研究」, 雑誌『斯民』第二編第二号所収, 報徳会, 1907年。『新渡戸稲造全集』第五巻所収, 教文館, 1970年, 178頁。
- 16) 同上, 180頁。
- 17) 新渡戸, 『農業本論』, 98頁。
- 18) 新渡戸, 「地方の研究」, 180頁。
- 19) 新渡戸, 『農業本論』, 158頁。
- 20) 雑誌『斯民』に掲載された文面では「地名」が「氏名」に, 「方言・俚歌童謡」が「言語・唄等」になっているが, 本稿では『全集』版に準拠した。
- 21) 新渡戸, 「地方の研究」, 181頁。
- 22) 同上, 185頁。
- 23) 蓮見, 前掲書参照。川田稔, 『柳田国男の思想史的研究』未来社, 1985年, 参照。
- 24) 柳田の農村における生活実態把握の重要性についての認識は, 『時代ト農政』(聚精堂, 1910年。『定本柳田国男集』第十六巻所収)の中に見られる。同書は1906〜09年に行った講演を元に編集されたものであり, 新渡戸の「地方の研究」と同時期に当たる。
- 25) 吉本隆明, 『共同幻想論』河出書房, 1968年, 159頁。
- 26) 柳田国男, 「郷土誌編纂者の用意」, 雑誌『郷土研究』第二巻第七号所収, 郷土研究社, 1914年。『定本

柳田国男集』第二十五卷所収，1970年，9 頁。

- 27) 柳田国男，「郷土研究の将来」，雑誌『郷土科学講座』第一冊所収，四海書房，1931年。『定本柳田国男集』第二十五卷所収，1970年，465頁。
- 28) 柳田の〈郷土〉概念の二重性については，後藤，前掲書，773-8頁に指摘がある。

(博士後期課程)